

中国語の環

第130号

『中国語の環』編集室編 2025年9月

- 目次 10 **中国語でどういう？** 死にかけ、生き返る
- 11 **例文で説き(=解き)ほぐす中国語文法**
Lesson 14 ペアを求めて… (その7)
- 12 **中国語と文化** ドキリとする料理名
- 13 **語彙学習の話** 中国語の「四字格」について
- 14 **看图学汉语** 这是什么动作?
- ※ **紛らわしい文法表現** “不能”と“没能”
- ※ **中国語の文法は面白い** 中国語の“想”“愿意”“要”について (1)
- 16 **中検のススメ** 中検が通訳の基礎力を作ってくれた
※Web版のみ



『中国語の環』Web

ひとことエッセイ

ある高等学校で講演をさせていただいた時に、ご挨拶いただいた校長先生のことばに「諸君は本日の先生の貴重なお話を他山の石として…」とあった。

「他山の石」は『詩経』小雅・鶴鳴中の“它山之石，可以攻玉”（他山の石，以て玉を攻むべし）を典拠とする語で、「他の山から出た石でも，自分の持っている玉を磨くことができる」くらいに解されている。その限りでは，校長先生のご挨拶に格別の違和感はないのであるが，これが「自分より劣っている人の言行も自分の知恵を磨く助けとすることができる」（『広辞苑』第7版）となると，「校長先生お人が悪いなあ」と言いたくなる。

ところが，これが一般的な解釈のようで，『新明解国語辞典』第8版に至っては，「たいてい役に立ちそうにないと見えても生かし方次第で役立つもの」としたあと，わざわざ「単に，手本・模範の意に解するのは誤り」と断っている。“比喻拿别人的长处补救自己的短处”（《现代汉语词典》第7版“攻错”の項）とする中国語の理解との隔たりは，どこから生じたのであろうか。

（上野 恵司）

発行 一般財団法人日本中国語検定協会

本誌掲載の記事，写真，イラスト等を無断で複製・
複写・転載することを禁じます。

死にかけ、生き返る

張 勤（中京大学）

タイトルの「生死」という極限状態の意味に対応する中国語の表現が“死去活来”である。「死にかけて、また生き返る」という激烈なプロセスを描くこの常用表現は、まず以下のような比喩的用法として見られる。

(1) 那场大病让她折腾得死去活来，瘦了十几斤。（あの重い病気で彼女は死ぬか生きるかの苦しみにさいなまれ、5キロ以上も痩せた。）

(2) 他在战场上受了重伤，疼得死去活来。（彼は戦場で重傷を負い、死ぬか生きるかのような痛みに襲われた。）

(1)と(2)では、文字通りのまたはそれに近い身体的・物理的な極限状態が描かれている。耐えがたい苦しみや激しい痛みによって、まるで生死の境をさまようような様子が表現されており、日本語で言う「死ぬほど痛い、死ぬほど苦しい」に近い。しかし“死去活来”は「死にかける→生き返る」という生と死の往復運動のイメージが強く、苦痛の継続性や波状的な激しさを際立たせる表現となっている。

(3) 听到爱犬走失的消息，他哭得死去活来。（愛犬が行方不明になった知らせを聞いて、彼は死ぬか生きるかのように泣き崩れた。）

(4) 失恋后，她伤心欲绝，好几天都沉浸在死去活来的痛苦中。（失恋した後、彼女は悲しみのあまり、何日も死ぬか生きるかのような苦しみに浸っていた。）

(3)(4)では、絶望や悲しみが極度に高まり、感情が制御不能となるような精神的・情緒的な極限状態が描かれている。日本語の「号泣する」「悲嘆に暮れる」をさらに強調したものであり、心が引き裂かれるような感情の激動が生き生きと表現されている。近年、この“死去活来”という表現が、「笑い」などのポジティブな感情に対しても、誇張やユーモアを込めて用いられるようになってきている。

(5) 那个相声太搞笑了，观众们笑得死去活来。（あの漫才は面白すぎて、観客たちは死ぬか生きるかのように笑い転げた。）

(6) 他讲的笑话把我们一个个都逗得死去活来的。（彼の話す冗談に、私たちは一人残らず死ぬか生きるかのように笑わされた。）

(5)(6)は、(1)～(4)のような「苦痛」のイメージから大きく離れているが、「感情の高ぶりによって身体的リアクションが抑えきれなくなる状態」を表す点で共通している。日本語で言えば「笑いすぎて死にそう」「腹筋崩壊」といった誇張表現に相当し、ユーモラスな文脈や大げさな語り口を好む場面で効果的に使われる。

このように“死去活来”は、その字面の激烈さゆえに、単なる「とても」といった強調を超え、感情や感覚の極限状態とそこでの動揺や変化のダイナミズムを表現する比喩として強い力を持つ。文脈に応じて重々しい悲劇からユーモアあふれる喜劇までを自在に描き分ける、中国語ならではの豊かな表現と言えるだろう。

Lesson14 ペアを求めて…（その7）

古川 裕（大阪大学）

日本語ではふつう単独＝シングルで言えばすむのに、中国語では対句＝ペアにすることで安定した表現になるという例が多くあります。今回はことわざや慣用表現を例にして、文のレベルでどのようなペアが成立するかについて見てみましょう。

たとえば、日本語のことわざで「朱に交われば赤くなる」と言いますが、中国語では同じような意味を表すのに“近朱者赤，近墨者黒”と言って「朱に近い者は赤くなり，墨に近い者は黒くなる」のように“朱／赤”と“墨／黒”がペアになります。人は友人次第で善人にも悪人にもなりうるというところが面白いですね。

では、「良薬は口に苦し」はどうでしょうか？中国語でも“良薬苦口”と言いますが，“良薬苦口利于病，忠言逆耳利于行”のような対句表現にもなって、日本語よりも情報量が増えます。直訳すると「良薬は口に苦いが病にはよく効く，忠言は耳に逆らうが身のためになる」というわけです。音声の面でも安定しているのは，句末が“病 bing”と“行 xíng”のように同じ韻母“-ing”で揃っていて，声調は違いますが，広い意味で韻を踏んでいます。

皆さんもきっとよくご存じの“上有天堂，下有苏杭”（天に極楽，地に蘇杭）という慣用句も対句です。この対句でも末字が“堂 táng”と“杭 háng”となっていて，“-áng”できれいに揃っていますね。蘇州と杭州が並ぶ順番は，脚韻を整えるために蘇州が前，杭州が後に来ているという仕組みであることがわかります。

こんな風に，脚韻が整ったことわざを『中検 成語・慣用語・ことわざ』（朝日出版社，2024年4月）から拾ってみました。ぜひ，意味の上でのペアを確認したうえで，発音してリズムの安定性も楽しんでください。

- ・ 病从口入，祸从口出（百病从口入，百祸从口出）…日本語では「口は禍の元」のように後半の一句だけ言います。
- ・ 不怕慢，只怕站（不怕慢，就怕站）…“慢 màn”と“站 zhàn”は声調も同じ“-àn”で韻を踏んでいます。
- ・ 饭来张口，衣来伸手 …“口 kǒu”と“手 shǒu”は声調も同じ“-ǒu”です。
- ・ 君子动口，小人动手 …“君子”と“小人”が意味上のペアになり，“口”と“手”で韻を踏んでいます。
- ・ 佛要金装，人要衣装 …“金装”と“衣装”で意味も発音もペアになっています。
- ・ 快马一鞭，君子一言（好汉一言，快马一鞭）…“鞭 biān”と“言 yán”は韻母が“-ian”です。
- ・ 马善被人骑，人善被人欺 …“骑 qí”と“欺 qī”は声調が違うだけです。
- ・ 远在天边，近在眼前 …“远”と“近”が反義語のペアで，“边 biān”と“前 qián”は韻母がどちらも“-ian”です。

ドキリとする料理名

加藤 徹（明治大学）

中国料理は多彩だ。日本人から見てドキリとする料理名もある。

以下、これからお食事をなさるかたは、あとでお読みください。

“灌腸 guàncháng”（灌腸）は、北方の庶民料理だ。ブタの腸にデンプンや肉などの具材を詰めて作る腸詰料理である。「灌腸」（かんちょう）は、腸の中に灌（そそ）ぎこむという意味で、医療行為としてのカンチョウも“灌腸”と言う。中国語の検索サイトに“灌腸”と入力して画像検索をかけると、料理の灌腸と医療行為の灌腸の両方の写真が並んで出てくる。中国人はおおらかだ。

“下水 xiàshuǐ”もドキリとする。食材としての動物のモツも、生活排水などの「下水」（げすい）も、中国語では“下水”と言う。

我们去吃下水吧！ Wǒmen qù chī xiàshuǐ ba!

は「モツを食べに行こう」だが、

下水溢出来了！ Xiàshuǐ yìchulai le!

は「下水があふれた」の意味になる。

なぜモツ料理を“下水”と呼ぶのか？

「下水」という漢字の組み合わせは大昔からある。儒教の経典『礼記』月令篇には「時雨将降，下水上騰」（もうすぐ雨が降って、川下や地下の水が逆流するだろう）とある。8世紀の杜甫も漢詩の中で「済江元自闊，下水不劳牽」（川を横切る渡し船は向こう岸まで遠くて大変だが、川を下る船は楽に進める）云々と詠んだ。「下の水」や「水を下る」などを意味する「下水」がモツ料理を意味するようになった理由は諸説ある。「昔は川辺で動物を解体して肉にし、余った臓物を川に捨てた。川下の貧民は、流れてきた臓物をすくって料理して食べた」云々の大衆語源説が有名だが、これは望文生義の俗説だ。

おしっこを意味する“尿 niào”や、クソを意味する“屎 shǐ”を含む飲食物も多い。“马尿酒 mǎ niào jiǔ”（馬尿酒）や“白马尿 bái mǎ niào”（白馬尿）はお酒。“猫屎咖啡 māo shǐ kāfēi”（猫屎咖啡。日本語では「コピ・ルアク」）は高級コーヒー。“牛屎饼 niú shǐ bǐng”（牛屎餅）は、南中国のスナック“甘草梅饼 gāncǎo méi bǐng”（甘草梅餅）の俗称。“鸡屎藤粿条 jī shǐ téng bābā”（鷄屎藤粿粿）は、客家（ハッカ）の餅菓子の名前。“尿蛋 niàodàn”は、浙江省東陽市の無形文化財“童子蛋 tóngzǐdàn”の別名で、卵を男子児童の尿で煮て作るゆでたまごである。

実は日本にも、郷土料理の「どぶ汁」や、黒糖まんじゅうの俗称「馬の糞」など、ドキリとする名前の食べ物がある。

飲食物は、人の命をつなぐ大切な糧だ。そこにあえてドキリとするような名前を付けた昔の人々のユーモアと活力に、敬意を表したい。

中国語の「四字格」について

沈 国威（浙江工商大学）

現代の言語理論では、人間の言語能力は文法部門と語彙部門から成り立っており、前者は文を作るルールを提供し、後者は「心的辞書」とも呼ばれ、あらかじめ語彙がインプットされている場所である。私たちは話す時、必要に応じて心的辞書から語を取り出し、文法部門に送り、文法規則に基づき、正しい文を産出する。外国語学習者が単語を一所懸命暗記することは、外国語の心的辞書を作る努力にほかならない。

第二言語習得の最新研究によれば、心的辞書には語だけでなく、語より大きい単位、例えばフレーズ、慣用句、成語、固定表現、そして一部の文も登録されているという。登録された項目が多ければ多いほど表現力が高いわけだが、近頃チャンク（chunk；語塊）の存在が脚光を浴びている。いわゆるチャンクは、中国語で言えば例えば、「春暖花開」「烈日當空」「秋高氣爽」「數九隆冬」のような語のかたまりと考えればよい。このような比較的固定した四字の組み合わせは、「四字格」とも呼ばれる。四字格は、構成成分の意味を知れば全体の意味も理解できる。この点は「成語」と異なっている。しかし、構成成分が固定した場合が殆どで、入れ替えることはできない。韻律的にも中国語に合致する四字格は、文体的に成語と慣用句の中間に位置すると考えられる。成語より分かりやすく、慣用句よりあらたまった語感があるという理由で、書き言葉や演説など正式な口語で多用される。

よく使われる四字格には一定のパターンがあり、それを押さえることによって、効率的に覚えることができる。以下に50もあるパターンの一部を示しておく。

形式	例語	形式	例語
…来…去	走来走去、翻来覆去	三…五…	三年五載、隔三差五
…天…地	惊天动地、顶天立地	四…八…	四平八稳、四面八方
左…右…	左邻右舍、左思右想	风…雨…	风调雨顺、风吹雨打
前…后…	前仰后合、前呼后拥	龙…虎…	龙腾虎跃、生龙活虎
一…不…	一动不动、一声不响	一…而…	一带而过、一饮而尽
不…不…	不远不近、不知不觉	无…无…	无影无踪、无忧无虑
非…非…	非亲非故、非驴非马	自…自…	自言自语、自作自受

四字格は約2,000語あると言われ、これはよく使う成語の倍の語数である。しかし、多種多様の成語辞書に比べて、四字格の学習参考書は殆ど存在していない。成語は、中国の人も意識的に学習しないと身につけられないのと違って、四字格については誰も辞書を調べ、意味を確認しようとしなからであろう。母語の人は自然に習得できるが、外国人学習者はそうはいかないかもしれない。やはり四字格の辞書を用意する必要があるのではないかと思います。

这是什么动作？【さまざまな動作(1)】

絵 張 恢

文 『中国語の環』編集室

站 zhàn

(まっすぐに) 立つ

- 站起来 zhànqilai 立ち上がる
- 站住 zhànzhù 立ち止まる
- 站稳 zhànwěn しっかりと立つ



坐 zuò

座る, 腰かける; 乗り物に乗る

- 请坐! Qǐng zuò! おかけください
- 坐在椅子上 zuòzài yǐzi shang 椅子にかける
- 坐汽车 坐火车 坐船 坐飞机



蹲 dūn

しゃがむ, かがむ

- 蹲在地下 dūnzài dìxia 地べたにしゃがむ
- 别在这儿蹲着。Bié zài zhèr dūnzhe. ここにしゃがみこんではいけません。



跪 guì

ひざまずく, 両膝を地につける

- 跪着祈祷 guìzhe qídǎo ひざまずいて祈る
- 他跪在地上不起来。彼は地べたにひざまずいたまま立ち上がらない。



吊 diào

ぶら下がる, ぶら下げる

- 小孩儿吊在爸爸的胳膊 gēbo 上 子どもがお父さんの腕にぶら下がっている
- 把衣服吊在树上 着物を木につるす



趴 pā

腹ばいになる, はいつくばう

- 趴着睡觉 pāzhe shuìjiào うつぶせに寝る
- 他在床上趴着看电视。彼はベッドに腹ばいになってテレビを見ている。





躺 tāng

横になる、寝そべる

- 躺在沙发上 ソファーに横になる
- 椅子上躺着一只猫。椅子の上に1匹の猫が寝ている。
- 躺椅 tāngyǐ 寝椅子



攀 pān

(物につかまって) 登る、よじ登る

- 攀着绳子往上爬 pān zhe shéngzi wǎng shàng pá 縄を伝ってよじ登っていく。
- 运动攀登 yùndòng pāndēng スポーツクライミング



蹦 bèng

(かかとで) ボンと跳ねる

- 孩子们蹦蹦跳跳地很高兴。Háizimen bèngbèng-tiàotiào de hěn gāoxìng. 子どもたちは跳んだり跳ねたり楽しそうにしている。



靠 kào

寄りかかる、もたれる

- 他靠着墙站着。Tā kào zhe qiáng zhàn zhe. 彼は壁にもたれて立っている。
- 背 bèi 靠背地坐着 背中合わせに座る
- 靠垫 kàodiàn クッション



爬 pá

はう、(はうようにして) 登る

- 婴儿会爬了。Yīng'ér huì pá le. 赤ん坊がはいはいできるようになった。
- 爬山 pá shān 山登りする



跳 tiào

跳ぶ、跳ねる、跳び上がる

- 她高兴得跳了起来。Tā gāoxìng de tiào le qi lai. 彼女は跳び上がって喜んだ。
- 跳高 走り高跳び ➢ 跳远 走り幅跳び

訳語のない語句は辞書を引いて調べてみましょう。

“不能”と“没能”

魯 曉琨（文京学院大学）

前回は否定副詞“不”と“没”が動詞、形容詞述語を否定するときの違いについて説明しました。今回は助動詞の否定形における“不”と“没”の使い方について話を進めていきます。

助動詞の中で、“愿意”“应该”“会”などは“不”の否定しか受けられません。例えば、

- (1) 我不愿意学医学，可父母非让我考医学部。

（わたしは医学を学びたくないが、しかし両親はどうしても医学部を受けろと言います。）

- (2) 学生不应该把更多的时间用在打工上。

（学生は多くの時間をアルバイトに使うべきではありません。）

上の助動詞は肯定形“愿意”“应该”“会”の前に“不”をつけて“不愿意”“不应该”“不会”という否定形となります。この場合は肯定形と否定形は対称的ですが、しかし、助動詞の肯定形と否定形は非対称的であるケースがあります。その代表的なものが“要”です。“要”は要求を表す意味の否定形だけ、“不要”となります。例えば“年轻人不要啃老。”（若者は親の脛をかじってはいけない）。“要”の他の意味はそれぞれ異なる否定形を持っています。

- 1 願望を表す“要”の否定形は“想”と同じく“不想”となります。

- (3) 甲：毕业以后他要到北海道工作，你呢？

（卒業後、彼は北海道で仕事をしようとしています、あなたは？）

乙：我不想到北海道工作。（わたしは北海道で仕事をしたくありません。）

- (4) 暑假跟朋友去函馆，她要坐新干线去，不想坐飞机。

（夏休みに友達と函館に行く予定ですが、彼女は新幹線で行こうといって、飛行機に乗りたがりません。）

“想”も“要”も動作者の願望を表す意味を持っていますが、この場合の“要”の否定形は“不要”ではなく、“不想”を用います。“要”より“想”のほうは意志が弱いため、弱い意志が否定されると、当然強い意志も否定されるわけです。

- 2 必要性を表す“要”の否定形は“不用”となります。

- (5) 甲：你要不要休息一会儿？（ちょっと休みませんか。）

乙：我不用休息。（休まなくてもいいです。）

- (6) 甲：这个星期天我用不用早起床？

（この日曜日、わたしは早く起きる必要がありますか。）

乙：你要早起床。（あなたは早く起きなければなりません。）

例(5)で示したように、否定形は“不用”となりますが、正反疑問文では、“要不

要”も“用不用”も成立します。

また、助動詞“得(děi)”も“要”と同じく實際上或いは情理上の必要性を表します。“得”には“不得”という否定形はなく“要”と同じく“不用”を用います。

(7) a 没得保姆，她得自己做饭了。

(お手伝いさんがいなくなり、彼女は自分でご飯を作らなければならない。)

b 又雇了保姆，她不用自己做饭了。

(またお手伝いさんを雇ったから、彼女は自分でご飯を作らなくてもいい。)

3 必然性を表す“要”の否定形は“不会”となります。

(8) 甲：你这样做，要后悔的。(このようにすると、後悔しますよ。)

乙：你放心，我不会后悔的。(ご安心ください、私は後悔しません。)

“会”も“要”も話し手がある状況が出現する必然性を推測するという意味を表します。“会”はプラスの意味でもマイナスの意味でも用いることができますが、“要”はマイナスの意味しか用いることができません。マイナスの必然性を推測する場合“要”は“会”よりさらに断定的です。弱い断定が否定されると、当然強い断定も否定されるわけです。

“可以”も肯定と否定は非対称的です。“可以”が許可を表す場合、否定形は“不可以”と“不能”がありますが、可能を表す場合は、“不能”しかありません。

最後に“不”でも“没”でも否定できる助動詞“能”“肯”“敢”を取り上げ、“不”と“没”の違いについて考えてみます。

「“能”“肯”“敢”+動詞」を否定する場合は動詞文を否定する場合と同じく、“不”は未来のこと、経常的なことに用い、過去のことには“没”も“不”も両方用いられます。過去のことに用いる場合、“没”と“不”の違いについて朱繼征(1995)では「“不”は『行動意識』の段階だけを否定し、『行動実行』の段階には直接に及ばない。“没”は『行動意識』の段階を認めた上で、その『行動実行』の段階を否定する」と説明されます。例えば、

(9) 小李的婚礼你去了吗？(李さんの結婚式に参加しましたか。)

a 我不能去，我跟他一见面就吵架。

(わたしは行けませんでした。彼とは顔を合わすと即喧嘩ですから。)

b 我没能去，他结婚那天我出差了。

(わたしは行けませんでした。彼の結婚式の日にあいにく出張でした。)

(9)aでは“不能”を用い、李さんの結婚式に参加する意志が生じる可能性を否定したが、(9)bでは“没能”を用い、李さんの結婚式に参加する意志があったが、事情により行動できなかったと言っています。

以上のことを覚えておけば助動詞の否定形をうまく用いられるだろうと思います。

参考文献 朱繼征1995, 中国語の「助動詞+動詞」と否定－「不」と「没」の文法的な使い分けと意味的な分析を中心に、『中国語学』242：32-37

中国語の“想”“愿意”“要”について（1）

王 志英（沖縄大学）

中国語の“想”“要”“愿意”は意味が似ていて、類義語として扱われている。“想”と“愿意”は主体が行動に移す前の段階で、主体の思考活動や願い、希望を表す表現であるのに対し、“要”は主体がある行動に取り掛かろうとする段階に使われる。

“想”は動詞と能願動詞として使われ、基本義は主体の思考活動を表し、主体がある思いを託したり、ある行動を起こしたいという気持ちを表したりする。

目の前にない人や物について思ったり、考えたりすることはその対象や物に対し、ある思いを託し、「懐かしむ」「思い偲ぶ」「懐かしがる」「会いたい」という気持ちを表すことになる。

(1) 奶奶可想你了。（おばあさんはとてもあなたを懐かしがっている。）

(2) 想亲人想得要命。（肉親が恋しくてたまらない。）

“想”の思考活動による内容は過去のものであれば、主体は過去のことを思い、「思い出す」「思い起こす」「思い出そうとする」「振り返ってみる」などの意味を表す。

(3) 想往事。（昔の事を思い起こす。）

(4) 想了半天才想起来。（長いことかかってやっと思い出した。）

不確定なことを考え、思考する場合が「推測する」「想像する」「ある可能性がある」という意味を表す。

(5) 我想他一定会来的。（彼はきっと来ると思う。）

(6) 一会儿可能要下雨，他想。（まもなく雨が降るだろうと彼は思った。）

“想”の思考活動の内容にならなければ、“想”が使えない。

(7) *我不想你离开我。

“想”の後に補語やアスペクト助詞をつければ、主体が思考活動を行った後にある結果や状態に達することを表す。

(8) 没想到三月份会这么冷。（3月なのにこんなに寒いとは思わなかった。）

(9) 想着这件事，千万别忘了。（この事を覚えていて、決して忘れないように。）

能願動詞として使われる“想”は主体がある行為を思うことが、主体の本能的な要求であり、主体の自らの願望を表し、日本語の「…したい」という意味に相当する。

(10) 我想当探险家。（私は探険家になりたいと思う。）

“想”はある行動を思い、考えるということが、主体の計画や狙いを表すことになり、「…するつもりだ」という意味になる。

(11) 我想改造这台机器。（この機械を改造するつもりだ。）

中検が通訳の基礎力を作ってくれた

岡本 悠馬（中国語通訳・翻訳者、講師）

大学の中国語の授業で、中検の存在を知った。

先生はニカッと笑いながら「まあ、在学中に1級を取るのは無理やろうなあ」と言った。これが私の心に火を点けた。「だったら目指してやろうじゃないか」と、思ったのである。1級の壁は高く、在学中の合格は叶わなかったが、自分なりに精一杯勉強した甲斐もあって、後に合格を果たすことができた。先生に報告すると、「1級合格は、素晴らしい!」と、あの厳しかった先生が手放しで褒めてくださった。それが嬉しくて、今でもしつこく勉強を続けている。

私はその後、中国語で仕事をするようになった。実際に現場で通訳をしていると、あれほど大変だった1級も、ただの入口にすぎなかったことを突きつけられる。しかし、振り返ってみると、今の仕事の基礎を作ってくれたのは、合格に向けて研鑽を積んだ日々だった。

中検において受験者を最も苦しめるのは、最終問題である日文中訳ではないだろうか。特に、準1級・1級に挑んだ人は、大いに鍛えられたと思う。準1級からいきなり難易度が跳ね上がり、「実務に即従事しうる能力」を示すにはこれくらい解いてもらわなければ困る、という中検の強いメッセージを感じる。日本語を中国語に訳す作業に慣れていない段階では、「古き良き日本の風景ってどう言うの?」「小言を食らう…?」と、手も足も出ないような気がしてしまう。たまりかねて解答例を見ると、「古き良き」が「古老而美好」,「小言を食らう」が「被责备」とある。どれも、それほど難しい言葉ではない。「なるほど、そう言えばいいのか!」と、納得する。もちろん、それですぐに自由自在に使えるようになるわけではない。次の問題に挑んではまた途方に暮れ、解答を見てハッとさせられる。その繰り返しであるが、そのうち不思議なことに、なんとなく日文中訳の勘所のようなものが見えてくる。

普段自分でも使わないような日本語の語彙や表現に出くわしたときに、「要するにそれってどういうこと?」「他に言い方はない?」と、原文を分析する習慣がついてくる。和語を漢語にしてみることで中国語に訳すヒントがつかめることもある。諦めることなく、できるだけ近い表現を探す。そうして、どうにかこうにか、部分点だけでももぎ取ろうとあがきながら、合格を手繰り寄せる。同時に、少しずつ、通訳の力も養われていく。「絶対的な正解が存在しない」という意味で、通訳の仕事も、限られた時間の中で部分点をもぎ取って次に繋げていくという営みだ。

母語である日本語の表現を解体し、文意を見極め、自分の中にある限られた中国語の材料を使い、文を再構築する。地道な繰り返しによって、両言語の間を自由自在に行き来できるようになることを目指して、今日もまた私は「部分点」を取るために机に向かうのである。